

## この40日余りを振り返る

10日前の11月24日14時17分、母が亡くなった。10月17日に入院して、39日目である。93歳であり「大往生」ではあるが、やはり悲しさと寂しさを実感した。通夜から告別式へと、あっという間に時間が過ぎ去った。さすが心身ともに疲れた。

学会で東京に出張していた時に連絡をうけ、帰りに病院に立ち寄った。担当医師によると末期の症状であるが、次の病院を探しておくよう要請された。入院3日目であり腹が立ったが、これも医療の「現実」だと考え、終末期医療やホスピスについて情報を集めたりした。入院してしばらくの間は流動食が食べられ、スプーンに入れて口に運んだ。やり方が下手だと「注文」？をつけられたりした。



写真は病室から撮ったもので、ベッドの横で遠くの景色を眺めながら過ごした。明るい

病室なので気分的に助かった。11月に入りほとんど意識がなくなっていったが、一人で付き添ったときは何度も語りかけたものだ。母について一口では語れないが、やはり昔のことが思い起こされる。病弱な私を必死に看病してくれたこと、夜遅くまで裁縫を続けていたこと、50年前の伊勢湾台風の夜のこと、などなど。

この病院には各階に「デイルーム」という部屋がある。ここから名駅の超高層ビル群が一望でき、病室とは違った気分できつろげる。ここにいると、看病する家族の様子、人間模様が伝わってくる。部屋の一角に携帯電話ができるコーナーがある。ここで遠くの景色を眺めながら、よく電話したものである。今回ほど携帯電話が重宝したことはない。いろいろ書きたいことはあるが、どうも調子が出ない。しばらく休んでいたレポートを書くなかで(書きたいテーマはいくつかある)、だんだん調子を取り戻していこう。

(2009年12月3日 記)